

Report on Practice of Art Education at Public Elementary Schools in Greater Tokyo

Yoshimitsu Kiyono

Abstract

There are approximately 1,450 elementary schools in the Tokyo metropolitan area, and over 95 percent of them have specialized teachers in charge of art classes. Though there are specialized music or housekeeping teachers, the number of the latter is not so big as that of the former or art teachers because of the size of the schools (Only schools with more than 13 classes have specialized housekeeping teachers). The art class is taught at different grades, varying from first to sixth grade. Outside the Tokyo metropolis, art is taught only at the schools in two or three areas.

The qualifications for specialized art teachers include: at elementary schools-- the same as teachers of general courses; at high schools--to meet requirements for specialized art or craft teachers. So, the requirements for art teachers are much stricter than those for teachers of general courses. In other words, art teachers are all graduates from teachers colleges or art departments. To sum up, education in greater Tokyo is more popular and sound than that in the other areas in Japan in terms of specialized education.

Japan's education is practiced under the guidelines made by Ministry of Education. The annual assigned hours for art classes at elementary schools are 68 for first grade and 70 for second to six grades. Moreover, the textbooks have to pass the review of Ministry of and given freely to the students. The textbooks for art classes are edited by four publishers specialized in textbooks, and local educational committees have the right to choose their own textbooks. However, several of them choose the same one at present.

I will make a report on "Practice of Art Education at Elementary Schools in Greater Tokyo" to the INSEA members who attend its Asian meeting in Taiwan.

Source:

Adachi District Shikahama First Elementary School	Hironori Niibara
Sumida District Third Terajima Elementary School	Takako Saido
Katsushika District Kamichiba Elementary School	Kazuo Nagano
Suginami District Nishida Elementary School	Yoshimitsu Kiyono
Koganei Municipal Ai Second Elementary School	Shizuo Gamo
Shinagawa District Tachiai Elementary School	Motoichi Ito

東京都公立小學美勞課程實踐報告

清野義光

摘要

東京都內共約有1450所公立小學，而其中的95%以上，皆設有專門教授美勞課程的專任教師。此外，雖也有專門教授音樂或是家政課程的專任教師，家政課的專任教師名額，受限於學校規模的大小（每年級擁有十三個班級以上的學校才會設置專任教師），因此專授家政課程的教師人數，不若美勞或是音樂老師般眾多。至於授課年級則因校而異，有的是從一年級一直到六年級都有，有的則不一定。至於東京都以外的縣市中，僅有兩三個地區之小學設有美勞課程。

專門教授美勞課程的專任教師所須擁有的教師資格分別是：小學——一般教師資格，中學以及高中——擁有專門教授美術及工藝課程之教師資格。因此比起一般科目的師資限制，可說是嚴格了許多。也就是說，教授美勞課程的老師，全都是出自專門培養師資的大學或是美術相關科系。由此可知，東京都的美勞教育，可說是日本專門課程之教育活動相當盛行的地區。

日本的教育乃是依照文部省（相當於教育）指導綱領而進行的。小學美勞課程的全年標準上課時數為一年級六十八小時、二～六年級七十小時。此外，各課程所需之教科書皆經文部省審訂，且免費分發給各個學生。至於美勞課程所需的教科書，則由四家專門出版教科書的公司出版，而各個市町村教育委員會負有選擇教科書的權利，不過目前的情況是由數個地區一起決定使用何種教科書。

我們將針對諸如上述之「東京都美勞課程之具體教育內容」加以報告，至於報告者則皆為預定出席此次1994年亞洲地區INSEA會議（台灣大會）之成員。

資料來源：足立區立鹿濱第一小學 新原 浩德

墨田區立第三寺島小學 齋道 嵩子

葛飾區立上千葉小學	永野	一生
杉並區立西田小學	清野	義光
小金井市立藍第二小學	蒲生	志津雄
品川區立立合小學	伊藤	元一

東京都公立小学校における日常授業実践の報告

足立区立鹿浜第一小学校	新原 浩徳
墨田区立第三寺島小学校	斎道 嵩子
葛飾区立上千葉小学校	永野 一生
杉並区立西田小学校	清野 義光
小金井市立藍第二小学校	蒲生 志津雄
品川区立立合小学校	伊藤 元一

はじめに

東京都には、1450校程の公立小学校がある。その95%以上の学校に図画工作科の専任教諭（以下専科という）が配当されている。又、図工科と同様に音楽科、家庭科にも専科があるが、家庭科は学校規模により（13学級以上配属）図工、音楽程とは言えない。担当学年は学級数により1年生からまたは途中学年から6年生までとなっている。東京都以外の県では、2～3地区においてのみ実施されているにすぎない。

専科教員の教員免許保有の状況は、小学校の全科免許所持者及び中学校、高等学校の美術と工芸の単科免許資格者となっており、他教科を教える全科教諭の構成とは大分変わっていると言いる。つまり、端的に言えば、教員養成大学及び、美術系大学の出身者によって構成されていることとなる。このような状況から、東京における図工教育は、日本においてかなり専門的教育活動がなされていると考える。

日本の教育は、文部省の定める、指導要領に基づいて行なわれている。図画工作科の年間標準時数は、68時間（1年生）70時間（2～6年）となっている。又、文部省の検定による各教科の教科書は、無償で配布されている。図工科の教科書は、4教科書会社で発行している。採択権は市町村教育委員会にあるが、いくつかの市郡がまとまって行なっているのが現況といえる。

以上のような、教育環境で行なわれている、東京の図画工作科の教育内容の実践について、報告を行なう。

報告者はいづれも、今回の1994年アジア地区INSEA会議（台湾大会）の参加者によって行なう。
(文責 清野)

「抽象画からの発想によるイメージ画」

東京都足立区立鹿浜第一小学校

図工主任（3年～6年担当）新原浩徳

I. 何故この題材を選んだか

「抽象画はわからない。」という大人によく出会う。逆に子供達は苦もなく抽象画を語る。「面白い。」「カッコイイ。」「〇〇〇みたい。」そこで「抽象画はわからない。」のルーツを探ってみた。おそらく大人に近づくある時期に絵とはこういうものという概念を植えつけられたのであろう。その概念からちょっとはづればふあんになり、大幅にズレるともう「分からない。」殊に「本物そっくりの絵は最高。」などという概念を植えつけた人々にとっては、「抽象画は全く分からない。」ということになる。逆に小さいころから多種多様な絵に接し、具象・抽象の区別なく「あれも芸術。」「これも素晴らしいアート。」という中で育てば「分からない。」症候群はなくなると思う。かつて「分からない絵」の代名詞代わりに使われたピカソの作品も長らく接している内に「分からない。」という人は数少なくなった。21世紀を生きる全ての人々が我々人類の財産であるアートをともにエンジョイ出来るように、幼少時から、多用な表現や芸術の素晴らしさを体感させたい。

II. 私が理想とする図工教材の条件（平面）

- ① 遊び感覚を伴いながら、気楽に取り組める題材。
- ② イメージやそれに伴うアイディア・技法を限りなく広げられる題材。
- ③ 多種多様な表現があることに気づき、より自由な表現を工夫できる題材。

III. 私の大作を見た子ども達の反応

夏休みに制作した私の作品（約4×5m）を見ながら、子どもたちが「デッカイなあ。」「これが芸術かな。」「4枚組み合わせるんだ。」などと話し合っている。そこへ私が入っていくと「先生がこれ描いたの？」と質問された。「その通り、先生が描いた芸術作品。」続いて又質問「題名は何ですか。」答「君達に考えてもらおうと思っていたところなんだ。」

10月に東京都美術館に飾るんだけどなかなかいい題名が見つからなくてね……。」

以上のような問答をしている内に、ひらめいたのが今回の授業である。

今までに、宇宙のイメージと結びつくような映像（ビデオ）から発想を展開する授業やエルンストなどの抽象的な要素を含んだ絵から発想を拡げる授業を展開したことはあった。然し、自分の抽象作品を教材に使うことには抵抗があった。「やらせ」ではないかという自問に対し未解決のままだったから…。果たして自分の作品を題材にした授業は是と出るか非と出るか？私の大作に出会った子どもたちの興味と関心を頼りに、この授業に取り組むことにした。

結論から先に述べると、この授業に取り組んでよかったと思う。いつもの図工の時間は私語が多く殆ど作業をしない子が一生懸命取り組んでいた。本人も「先生、オレあんなに一生懸命やったの生まれて初めてだよ。」と帰り際に挨拶していった。他の子たちもそれなりにマイペースで自分の作品に没頭していたと思う。何よりうれしかったのは、今までどんな教材にもあまり興味や関心を示さなかった子が、その子なりに絵を完成させたことである。

IV. こうして授業は、始まった。

「この絵に題名をつけて下さい。題名はいくてもいいです。10でも、20でも。」

子どもたちは思いつくままに、どんどんタイトルをメモしていく。（図工の時間専用のスケッチ・ブックに）

5年生のメモより

①紫とオレンジのまざりあい ②絵の具の国の入り口 ③不思議な世界 ④ふしぎな文字
⑤たてでもよこでも見える変な絵 ⑥時間が止まった世界 （以上は非具象的なイメージ）

⑦燃える紫雲 ⑧雲の中にとじこめられた怪物 ⑨死神が送ってきた悪魔の煙 ⑩雲の国に吸いこまれる動物たち ⑪もくもく宇宙人 ⑫不思議なもくもくピカソランド ⑬あふれるけむり ⑭けむりのうずまき（紫の部分から雲や煙を想起したイメージ）

⑮めいろにさまようようかい ⑯あくましょうめつ ⑰悪魔たちのパーティ ⑱あくまのとびら 21おばけの森 22禁断の悪魔 23かべの中であばれるあくま 24なぞのマスクをかぶった怪物 25悪魔の雲 26魔女がとなえた魔法の炎 （悪魔や怪物のイメージを想

起したもの)

28ふしぎな森の迷路 29ふしぎな迷路ランド 30迷いのカベ 31かべに浮かび出たあくま 32谷間のどうくつ (壁や迷路のイメージ)

33うごきだすモノ 34さまよう脳ミソ 35人間とへんしん物との合体 36まいおちる液体 37ねこなまくび 38すいとるネコたち 39異次元の動物たち 40私の体の中 41迷路にさまよう宇宙生物 42バットマン 43透明人間の無限の時間と無の心 44あばれる悪魔の血 (動物や肉体の一部のイメージ)

45四次元空間 46ふしぎなやみの世界 47とけこむ世界 48時間が止まった世界 49未来の空 50鏡の中の世界 51魔人のたき火 e t c。

「さて、今メモした題名の中から1つだけ一番気に入ったものを選びましょう。そして自分がその題名で描くとすれば、どんな絵にしたいか考えて、自由に描いてみよう。」という投げかけにより描き始めたのが以下のアイデア・スケッチである。どうしても、題名を思いつかない子は、自分の好きな題で描くことにした。中には一人で27タイトル想起した子もいる。(6年の女の子)

①まほうの火山 ②ランプの精 ③ボディビルダー ④悪魔がきた!! ⑤星人の仲間 ⑥悪魔の苦悩 ⑦化け猫 ⑧猫のうらみ ⑨すいこまれる悪 ⑩メイロをさまよう猫 ⑪のろわれるビルの火事 ⑫人類の最後 ⑬悪魔の血 ⑭悪にすいこまれる神 ⑮悪魔の城燃える ⑯死のう!! ⑰悪の叫び ⑱悪のめつ亡 ⑲悪の波にのまれる神 ⑳悪のおおかみ ㉑人類最後の道 ㉒時空の橋こわれる… 27タイトルの内 5つは2つを1つにまとめた。悪や滅びのイメージ多い「大きな画用紙に描くときは、スケッチ・ブックの下絵と違ってもいいですよ。」つけ足したり、もっと工夫したり大いに結構です。」

ここでわが校の児童の一般的な傾向について、図工室での様子を述べたい。

①こちら(指導者)が懸命に取り組んだり存分に楽しむ心情は、必ず相手(子どもたち)にもストレートに伝わる。純心で素朴な子が多いと思う。逆も又真なりで、手抜き教材や子ども達のニーズに合わない教材には、それだけの反応しか返ってこない。まず教師自らが楽しめる題材・こどもと共に創り出す喜びを味わえる教材を探すこと。これは我が校だけのことではないと思う。絵を描くのも、片付けも学年で一番遅いM子ちゃんとこんな問答をしたことがある。ある放課後M子「先生、図工を教えるの好き？」私「大好きだよ。M子ちゃんは図工好き？」M子「うん、先生が面白いから。」

②低学年ほどイメージの拡がりが大きい。

例えば、今回の授業の場合も3、4年生は、次から次へと数多くのタイトルを思いつく。

高学年には題名を想起できない子が数人いた。これも我が校だけの傾向ではなさそうだ。他校でも同様の事例をよく聞く。

③タイトルは思いつくが、画面に表す場合に抵抗があると、安易に人マネをする子がいる。現在は人マネをしても、自分の表現に自信がついたり、抵抗が少なくなれば自分なりの表現を見出すだろうと思うが。

④イメージのふくらみを適切に画面に定着させる手だてにとまどいがあるようだ。これは技術の面も含めて指導の問題点でもある。

V. 授業中に感じたり、考えたこと

「やらせ」の問題は未解決のままであるが子ども達は意欲的に取り組んだと思う。殊に①楽しみながら多様なタイトルを想起したこと（イメージの拡がり） ②多様な表現を試みたこと（自由な表現の工夫）については、前述した通りである。

今回の授業は授業者自身の1つの作品からイメージを拡大していく試みであった。可能ならば、多くの作家のオリジナル作品を展示し、その中から子ども達が好きな作品を選んで、イメージをふくらませていく授業も展開してみたい。もっともっと多種多様で自由な表現が生まれるだろう。

更に大きな夢を語れば、F・ステラの大作「フル・ムール」やR・デュフィの大作「電気の精」など、オリジナルを間近に鑑賞し、体感したものからイメージを拡げる試みなどどうだろう。子ども達は、きっと素晴らしいリアクションを見せてくれるにちがいない。

* 「やらせ」の授業スタイル

教師の美意識により選んだメニューを、子供たちが、ただ受動的に消化するだけの授業スタイル。子供たちの創造性を無視し、自由な表現活動とは逆行する形態。

木を彫る「こわい顔、強い顔」

対象学年 6年生(11～12才) 制作時間 8時間

はじめに

児童の五感を満足させながら、自由にのびのび出来るようになってもらいたいと思い、いろいろな、いろいろな手だてを考えながら日々努力している。

図工室という空間は楽しく、何でもある所ということで、喜んで来ているが、いざ表現活動となると、こちらの意図した事が理解してもらえず固定概念から離れられない児童が多く見受けられる。つまづいている子には、個人的に指導して見守っている。

- 1、目標 ・こわさ、強さをイメージし、目、鼻、口、ほほ等を立体的に表す工夫をする
・木の性質を見ながら表現方法を試みる

- 2、準備 (教師) 丸太を半分に切ったもの(170mm×200mm)

(カナダ檜 - 公園の工事に使ったあまり物)

木槌、のみ、彫刻刀、紙やすり、工作カラー、作業台

(児童) 彫刻刀、軍手、雑巾(タオル) サインペン

3、展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1、イメージをスケッチする 2、木にサインペンで下書きする 3、1cm幅ののみと木槌を使ってサインペンの線を打って切り込みを入れる 4、全体を荒削りした後、更に彫っていく 5、彫刻刀で細かい所を彫る 6、紙やすりで研ぐ 7、工作カラーでポイントだけ色付けする	・カナダのトーテムポールや、円空の木彫の話、家のお守りの話などをしながら怖い顔のイメージを描かせる ・半立体の表し方の特徴について話す ・のみの使い方の説明をする ・出っ張らす所やへこます所を良く考えて削り落としていく ・のみは表裏場所によって効果的に使うようにする(安全に十分注意する) ・木目の美しさに気付かせる ・木肌の色を残すようにする。ベタ塗りはいしない

4、自評 ・全員の作品を並べて観賞しあう

- ・のみを使うのは初めてだったので、大変だったようだ。木が堅かったが、よく頑張って彫った

「古い画板のオブジェ」(立体)

対象学年 5年生 (10～11才) 制作時間 6時間

1、目標

- ・捨てるような古い画板を使って、おもしろい顔と手と胴体を切り抜き、組み合わせて空間に立つ立体を作る

2、準備 (教師) 古い画板、電動糸鋸、釘、金槌、工作カラー

(児童) サインペン、物差し

3、展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1、板に顔と手を描く 2、電動糸鋸で切り抜く 3、残った板から、支えに使う分の板(5mm幅)を切る 4、残った板で胴体を考え、顔と手をいろいろに組み合わせてみる 5、釘を打って固定する 6、支えの板を胴体の下に鋸で切り込みを入れる(5mm幅) 7、十文字にかみ合わせて空間に立てる 8、工作カラーで色をつける	・顔は何でもよい。手は一つでもよい。形は実物に似てなくてもよい。この世にない自分だけの形を見つけさせる。 ・板の幅が5mmと薄いので、うまく合わせるように線をきちんと計っておくようにする

4、自評

皆の作品を廊下に並べて楽しむ。

「へちまと遊ぼう」(絵)

対象学年 4年生(9～11才) 制作時間 6時間

1、目標

自分たちの育てたへちまの収穫を喜び合いながら、その表現を深めるために、ローリング、コラージュなどの技法もとり入れて絵を描く

2、準備 (教師) 画用紙(4切り) ローラーセット、カッターナイフ

(児童) へちまの葉2枚、絵の具セット、糊

3、展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1、へちまの葉の裏に絵の具を塗り 画用紙の上に置く	・葉脈の美しさに気付かせる
2、ローラーに絵の具をつけて上に向かって転がし画面の肌を作る	・予期しない美しい画面が出来るように2色か3色使わせる
3、ダンボールでへちまの形を2～3切り取り画面の適当な所に貼る	・画面構成を考えさせる
4、鼻、つる、茎、、自分や友達の遊んでいるところを自由に描く	・人をたくさん描かせる

4、自評

友達同志作品を見せ合う

「水で何ができるかやってみよう」

東京都葛飾区立上千葉小学校

図工専科（4～6年担当）永野一生

「水を運ぶ」

——— 水を運んで何ができるか ———

○はじめに

墨田区の図工部でいろんな素材を扱いつくした感があった時、水を造形活動の素材に何とかできないものだろうかという話が出た。やってみることになり、結果的に流動性、透明感、温度など水の持ち味を損なわないで素材として扱うにはビニール袋を使うしかないなということに落ちついた。

「大きなビニール袋に水を入れて『ウォーターベッド』を作って遊ぼう」という提案が出たのだが、いざゴミ袋程度の大きな袋に水を入れてみると重くて動かないしすぐに破れて水びたしになりそうで危険？きわまりないものであった。あきらめが肝心というわけではないが、メセナがひかえていない我々小規模組織は経済的なことも関連して、あっさり手近のビニール袋でということでプヨプヨだかポヨンポヨンだか妙に揺れ動き形が一定しない人形や動物君を作ることになった。

校庭でビニール袋に水を入れてもらった子どもたちは、ビニールテープや紐を使いながら袋同士をくっつけ、フェルトペンで顔を描いたりして楽しむことになるのだが、そこが神のなせる技といおうか、水のなせる・・・というかあちらこちらで水の反乱である。水を素材に扱ってもそれを閉じ込めているだけでは水もそれを扱う子どもも満足感がなく袋に穴が開いてチョロチョロ水が出てくるとそれを突破口に地面に線ができスプラッシュがおこり、しまいには滑り台の上から水袋をころがしたりウォーターシュートのように滝流しまで発展した。水の言い分を聞けば至極当然、子どもの反応も水を得た魚のごとくといえ言いつぎかもしれないが、ここぞとばかり夢中になって水とたわむれ、格闘していた。

この授業を楽しみながら見ていた私は、提案者が最初にやりたかった『ウォーターベッド』のことが気にかかった。身体感覚による授業研究を墨田では継続的にやってきたこともあるが、何か今一つスケールがなく心残りである。

幸いに、親からぶ厚くて26インチテレビが入る程度のビニール袋をもらったので、提案者の意図に少しでも近づく授業が私なりにできたらし『水を運ぶ』という授業を考えた。

このテーマから想像するとコンセプチュアルに感じられるが、実際は、身体感覚的、具体的に発展した授業になった。

・活動のねらいと順序

(ねらい)

- ・水の形、重さ（量感）、触感、温度、透明感などを水を運ぶ（非日常的）ことによって素材（水）の再認識をする。
- ・素材に対するさまざまな全身活動へと発展する。

(用具・材料)

水・ビニール袋・ビニール紐・はさみ・ホース・水着

(場 所)

校庭及び砂場

(活動の順序)

- ①・水着を着て散水用の水道口のあるところに集合する。
 - ・大きなビニール袋を配ってもらい、順番に水を入れてもらう。
 - ・手伝ってもらい袋を紐でしばり、水がこぼれないようにする。
- ②・水を水道口から抱えるようにして砂場まで運ぶ。
 - ・運んだ人は砂場の上にしきつめてゆく。
- ③・砂場に集まって、ビニール袋の上に寝ころんだり、ジャンプしたりして体ごと水の感触を楽しむ。
- ④・袋の破れなどから溢れてきた水を使って砂場の中で体全身を使って活動する。
 - ・自然発生的なグループで作ったりする。
 - ・必要があればシャベルやバケツも活動の補助道具として使う。
- ⑤・作ったもので遊びながらかたづける。
 - ・先生と子どもの活動のようす

学習の流れに示してあるように、実際は④から後は、自分の意図していない活動に発展した。ビニール袋を配ると、子ども達はまるでビニール服のファッションショウのようにスッポリとかぶって並び、順番に水を袋に入れてもらった。中には、手伝ってくれた主事さんに「いっぱい（いれて）」とおねだりする子もいた。袋の口を縛るのを手伝ってもらうとすぐに、砂場へと重い重いと言いながら歯を食いしばって運んでいった。

厚手のビニール袋なので少々ひきずっても破れない袋だし、砂場まで約15mで痛まない程度の距離だった。さすがに、女子のほうは二人で運ぶほどに重そうだった。最後には台車を借りてきて運ぶ子どももいた。袋がいったん砂場に運び込まれると、少し平らになり量感が前ほどではなくなった。

袋が砂場にだいたい運び込まれると、指示をしなくても袋に乗ってユラユラを楽しんだ

り、ジャンプして転んだりし始めた。袋の上に寝ころんでみる事は気付かないかったの
こちらで挑発的にやってみせた。男子が真似をして寝ころび、運び込まれてきた袋の一部
の水漏れと激しいユラユラジャンプの応酬で袋の水が次々と溢れ、砂場は水浸しになっ
た。その後は、予定外の発展的活動になり砂で作った水路や堤防、山やトンネルと水を使
った砂遊びとなった。校庭の砂場付近は潮風のない砂浜空間となった。

当初は、只、水を運ぶ、寝ころがる、ジャンプして遊ぶまでしか考えていなかったのだ
が水が溢れて砂遊びに発展するのは子どもにはしごく当たり前のことだった。

○水でいろいろやってみよう

参考の為に水に関係した教材を使って日常的にやってみたことをランダムに取り上げて
みたいと思う。

①「消える絵から紙粘土」

- ・わら半紙の印刷物の余りなどの裏に水で絵を描く。
- ・絵を描いている内に天気がいいと消えてくる。つまり、消える絵。
- ・上から何度も描いている内に紙がびしょびしょになるので、なった時点で紙を細かくちぎらせる。
- ・お皿に入れたちぎった紙を廃材の丸棒でトントンつぶす。のりや絵の具を入れる。
- ・紙が水とともに変様していろんな色の紙粘土ができあがる。

②「校庭いっぱい水で落書き」

- ・ペットボトルや空き缶に穴をあける。ペットボトルには2つ穴をあけ、空き缶にはプ
ルトップのところにガムテープでふたをして、水の出の調節をして絵を描く。
- ・絵を描いているうちに体をバレリーナのように回転させながら水をふりまくのがおも
しろくなったり、ボトルを空中に投げて雨を降らせたり様々な活動がおこる。
- ・校庭の土に水たまりができると水路や堤防を作る活動も始まる。

③「粘土で水の道を作る」

- ・不要の板や粘土板と粘土を用意する。
- ・板の上に粘土で道を作る。
- ・後で水を流すことを想定して粘土の道の両側に塀を作る。
- ・板の下に物を入れて道を坂にする。
- ・水を流して溢れるところを粘土で修正する。
- ・道の最後の所にストローの様な管をつけて少しずつバケツに流れていくようにする。
- ・水を流したりためたり、水路の流れを変えたりして遊ぶ。

④「何に見えるかな（マーブリング）」

- ・ マーブリングの液を使って模様を作って遊ぶ。（マーブリングのやり方を知る）
- ・ 和紙と同じ大きさの色画用紙（黒）角から角になるべく回り道をして蛇行して切る。
- ・ 切り取って二つに分かれたどちらかの紙をはがせる糊を使って簡単に留める。
- ・ マーブリング液にはった紙を付けて手早く模様を写し取り黒い紙をはがす。
（手早くしないと紙がはがれない。）
- ・ できた模様からイメージを働かせてフェルトペンなどで絵をかく。

⑤「ニョロニョロ水虫動物」

- ・ 傘を入れるビニール袋とセロテープ、ビニールテープ、絵の具を用意する。
- ・ ビニール袋に水を入れて自分の好きな大きさにする。
- ・ 袋の途中をセロテープで縛って形を変える。
- ・ 色をつけたい時は絵の具で作った色水を加える。
- ・ 首にかけたり、抱いたり、頭にのせたり、ぶらさげたりして遊ぶ。
水の感触が心地よい。

⑥「ペットボトル船」

- ・ ペットボトルとビニールテープを用意する。
- ・ ペットボトルの途中に穴をあけそこからハサミで切断する。
- ・ 切断したところから人を乗せるところなどを切りとって形を作り、飲み口のほうと底の方とをテープで結合する。
- ・ 切り取った残りの形をくっつけたりビニールテープで模様をつける。
- ・ 流しなどに水をためて船が浮かぶかどうか確かめる。
- ・ アルミホイルなどで乗っている動物や人を作ってのせる。
- ・ バランスがとれたらプールや池に浮かべて遊ぶ。
- ・ 浮かべた後は車をつけて地面を走らせてもよい。

○おわりに

水そのものを題材にということで試みてみたことをあげてみたが、水先案内人という言葉があるように水を扱うのに必ず媒体が必要となる。仲介になるビニール袋や紙や粘土が必要であるため間接的で水そのものの造形化に至らない。それほど、水は流動的で変わりやすく掴みきれないものである。思ってみると、氷や雪なども水に関連した教材として工夫の余地が残されている。とはいってもその残念ながら東京では雪や氷はつかの間のことである。沖縄のエメラルドの海の水もないものねだりであり、水そのものの造形は移ろいの空の雲かもしれない。

「なんだこれは」

対象学年（6年生 11～12才）

制作時間（6～8時間——単位時間45分）

授業の流れ

- ・袋に入った不定形の物体を手で触り、形態の把握を行なう
- ・自分なりにイメージした形を木から掘り起こす
- ・袋より物体を出し、視覚を通じて形態の把握を行なう
- ・使用材料、道具類

杉木材（3.5×4.5×22.5CM）

鋸、電動糸鋸、のみ、切り出しナイフ、彫刻刀、木工用鉄やすり、C型クランプ
紙やすり、ウッドワックス

考察

導入として使用した、不定形の物体は凹凸のある曲面の樹脂で出来ている。東京都図画工作研究会が、継続的に行なってきた観賞教育研究の一環として、グッゲンハイム美術展（1992年西武美術館で開催）の折りに教材として開発、作成されたもので行なった。

何故不定形の物体かといえば、

- 1) 手に心地よく馴染む形であり、触覚を通じて感覚、感性に通じるものである
- 2) を受けて、目をつぶった状態（袋入去れた状態）で感じられるものであること
- 3) 具体物をモチーフに使用した場合だと「何であるか」という謎解きになってしまうことから
- 4) 具体物の再現となると、この年令層の児童の場合、完成度の要求と制作・表現とのギャップが大きく、制作そのものの喜びからかけ離れてしまいがちである。不定形の場合、自分のイメージを拠り所として行い易い
- 5) 定型としての規格材を不定形へと変容させることによる面白さ
- 6) 抽象形態に対する関心の目の育成、については、思考、観念、制作面の導人的前段階の育成

その他の背景による。

不定形を基とした展開例

「風を描く」

間接視覚としてのみ捉えられる風を造形化する

「雨を描く」

透明な水を色彩化するとともに、雨の降る様（ムーブマン）を造形化する

「雨を捕まえる」

雨降りの日に、画用紙に水滴を受けてきて、絵の具で水を水滴上に注することによって偶然及び時間の定着化をする

「色の川」

水だけを含ませた太筆で、自由な線を描く。水が乾かない内に、筆で絵の具を何色か注す。（アクリル絵の具がよい）

「色面構成」

目を瞑り出来るだけ何も考えないで、鉛筆でフリーな連続線を描く。カラーペンを使い囲まれた線の内部を色面で埋める。必要に応じ幾つかの面を統合してもよい

「波を描く」

波の動きに観点をあて（動き、停止時間）造形化する

「渦巻きを描く」

渦の動きを筆のストロークに留意して造形化する。（動きと重層する空間表現）

「春色の絵」

春の芽吹きの色から発想して自分のイメージとしての色をつくり、雰囲気としての画面空間を描く

「芝生を描く」

単体の芝の集合体としての芝生をオールオーバーな画面表現を行なう。春、秋、等の季節感からの色彩表現も行なう

「交錯する空間」

台面に針金の一端を固定し、曲線を作り残りの一端を固定する。更に、線を跨いだり潜ったりさせながら数本の針金を固定する。紙粘土を針金に巻き付ける。必要に応じ着色を行なう。

「空間で揺らぐ形」

細い割り竹を縛り、風に揺らぐ形態を作る。和紙や透明ビニールを張り、必要に応じて着色を行なう

『風のささやき』 —— イメージを形にしよう —— 授業学年 5年生(10歳)

指導者 東京都 小金井第二小学校 図工専科 蒲生志津雄

1. 内 容

「風」という、目に見えないものを各自の感性を駆使し、紙を使って表現する。

2. ねらい

- ・風がそよいだり、吹き荒れたりするさまを、心の中にイメージ出来る。
- ・障子紙(和紙)のふくらみを利用して、風の動きを表現する。
- ・一人ひとりが積極的、自主的な工夫をし、イメージを形に表す努力をする。

3. 材料・用具

- ・障子紙・色画用紙・ボール紙・接着剤・アルミ線・絵の具・ガムテープ・他

4. 表現の過程

- ①今日は、目には見えないけど、感じることは出来る「風」について考えてみましょう。
目を開けた時、閉じた時、風を感じた時

場所による違い・・・校庭で、教室で、公園、道、海、空、

風の強弱、印象・・・そよそよ、さわさわ、がさがさ、びゅうびゅう、

- ②皆が感じた風のイメージを、今日はこの紙で立体的に表してみましょう。

- ・障子紙を適当な大きさに切り、しわしわにしたあと、立体的になるようボール紙に接着する。〔塊の意識、リズム感、動勢のある並べ方〕
- ・自分のイメージを強調するためにボール紙に他の色画用紙等を貼ってもよい。
- ・アルミ線をつけて花や雲、鳥などをつけたしてもよい。
- ・障子紙だけでなく、金紙や色画用紙などで変化をつけてもよい。
- ・彩色については各自の表現に合わせて考える。

5. 題材の観点

- 1) 不定型なもののイメージ表現力(個の発想力) 2) 紙のもつボリューム感
3) 障子紙(和紙)の活用(意外性への応用力) 4) 並べ方によるリズムや動き

これらを子どもの自由な感覚で発想を広げ、表現していくかがポイントである。それが子どもの心の中に入った時、もはやテーマとしての「風」に意味性は消え失せて、波であっても、雨であっても良いのであり。又、異なる表現方法を見つけ出せるならばそれはさらに素晴らしいことである。図工科にとって、可能な限り子どもたちの持てる感覚や能力を十分に発揮しながら造形活動を楽しみ、さらに、それらの感覚や能力を自身の力で伸ばし、高められるようにすることが重要である。

品川区立立会小学校 伊藤 元一

直感的な感じ方を大切にした作品鑑賞を起点とする表現。―――鑑賞資料の「赤いマスク」は古典的な美の概念、規範、（写実性・形の理想化）とは違う、素朴で力強い形をしている。この作品の鑑賞を表現の起点とした。

また、表現方法においても石膏を直接手で触れドロドロした感触を味わい、その質の変化を感じたり驚いたりしながらイメージを広げていくことにする。

材料――石膏、タオル、ひのき棒、絵の具、

1. 「赤いマスク」をVTRで鑑賞する。（約3分）

- ・素朴で力強くどことなくユーモラスな仮面、見ているうちに、いつしか原始の時代へと、タイムトリップしてしまう。

2. 仮面づくり

- ・水に石膏を溶かし、その中に両手ごと布（タオル）を浸し手で石膏の感触を感じながら、たっぷりと石膏を染み込ませる。
- ・石膏が染み込んだタオルを広げてビニールの上に置き、色々なしわをつくりながら、ユーモラスな表情の仮面をつくる。
- ・石膏がしだいに固まってくる。その感触の変化に子どもたちは皆びっくりした。

3. 「赤いマスク」をVTRで鑑賞する。（約3分）――今度は色彩を中心に

4. 仮面の彩色

- ・色についての話――「大昔、人間がまだ電気もロウソクも知らなかった原始の頃、夜は真っ暗闇となり、とても恐ろしい時間だった。そんな時、人間は、赤い色を太陽の色として、それを顔に塗って太陽の力を自分の体内に宿し、勇気を付けていた。」

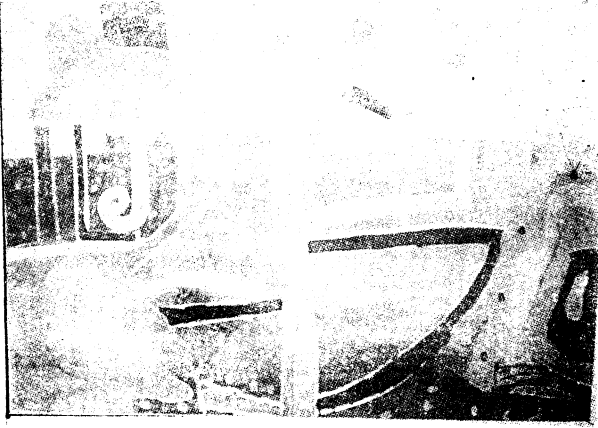
「他にも、色にはそれぞれその色の力があり、その色を顔や仮面に塗ることで、その色の力を体内に得ていた。青には青の力、黄色には黄色の力……………」

「何者にも負けない強い仮面は、あらゆる色で配色された仮面だろう。」

- ・子どもたちは、こんな色の話を聞き最も強い仮面「カラフル仮面」をつくるために、いっしょう懸命色づくりをし仮面に色の力を込めた。

5. 仮面を立てる――鑑賞へ

- ・出来上がった仮面は、しっかりと立ち、その力を周囲に放っている。
- ・子どもたちは、仮面の立ち並ぶ中でその力を感じていた。



迷いの森 (5年 女)

<新原>



ガイコツのパニック (5年 男)

<新原>



教材とした作品と作家 (左から2人目)

<新原>



木を彫る <斎道>



木を彫る <斎道>

古い画板

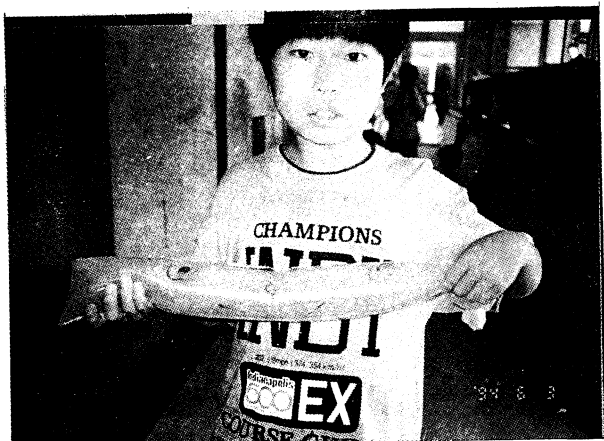
のオブジェ

<斎道>

ヘチマと遊ぼう

<斎道>





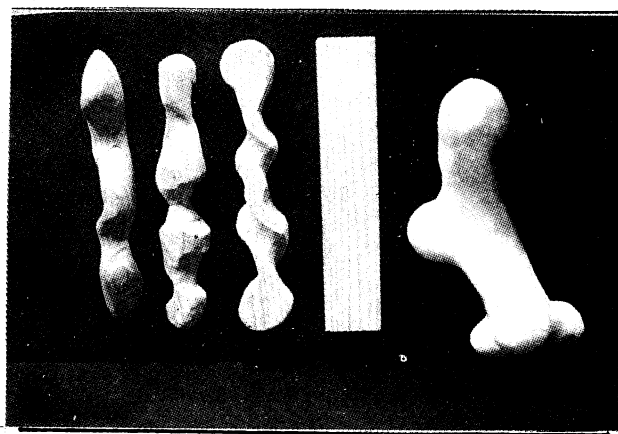
水で、、、
 <永野>



水で、、、
 <永野>



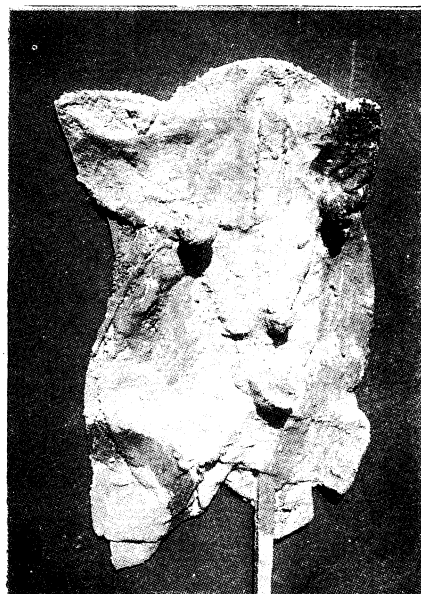
水で、、、
 <永野>



何だこれは
 <清野>



風のささやき
 <蒲生>



カラフル仮面
 <伊藤>